

ひびきジャーナル



編集／発行 特定非営利活動法人 純正律音楽研究会

〒106-0031東京都港区西麻布2-9-2 Tel 03-3407-3726 Fax 03-3797-5640 e-mail:info@pure-music.ne.jp

-対談-
 玉木宏樹の
 この人と響き合う

ピアノ調律技師
 戒居広平さん

戒居さんには昨年十月、玉木の編曲による水野佐知香さん荒井章乃さん母娘のデュオヴァイオリンCD「ゆめ・・・くるみ割り人形ほか」を山梨県牧丘町民文化ホールで録音した際、伴奏のピアノ、ベーゼンドルファー（注1）の調律をお願いしました。その時のピアノの美しさに驚いた玉木が、ベーゼンドルファーの調律に精通される戒居さんに、あの美しい響きの秘密、またピアノの調律、ピアノの音程とはどのようなものか、お話を伺いました。

ピアノを美しく響かせる技

玉木宏樹（たまきひろき）
 一九四三年生まれ、神戸市出身。東京芸術大学ヴァイオリン科卒。純正律音楽研究会代表。作曲家・ヴァイオリニスト。



戒居広平（えびすいこうへい）
 一九七一年生まれ、埼玉県熊谷市出身。国立音楽大学調律科卒業後、日本ベーゼンドルファー、ウイーンベーゼンドルファーを経て独立。日本ピアノ調律師協会会員。ベーゼンドルファー認定技術者。スタンウェイ協会会員。

ベーゼンドルファーの魅力
玉木 僕の今までの経験だと、スタジオのピアノは圧倒的にヤマハが多いし、コンサート会場だとスタンウェイが多くて、どっちにしてもピアノって濁った「ドミソ」がカッソーンとくるのが嫌だと思っていた。ベーゼンドルファーだと「ドミソ」が平均律で汚いのは変わらないんだけど、気にならないんだよね。あれはどうしてなんだろう。

戒居 ベーゼンドルファーはピアノ造りのコンセプトが他のピアノとは違います。ベーゼンドルファーピアノは楽器全体を響板の延長として造っています。響板とは弦の振動を音に変える重要なパーツです。材料はスプルース（注2）を使います。他のピアノとの違いは、この響板材をケース、支柱系にも使用していることです。ボディーのほとんどが共鳴体で、エネルギーが遮断することなく巡ります。発音してから減衰していく時間の長さ、美しさが魅力的です。ピアノは打楽器であり弦楽器でもあるのですが、ベーゼンの場合には叩いた瞬間の打撃音も音楽的なものになるよう、鍵盤の下にある材料も響くようになっていきます。

玉木 なるほど。一体感があるんだね。だからカチューンと来ないで、いぶし銀のようにふわっとする。

響きを重視しているから、ちょっと発音自体が「もこっ」として、るように言われることもあるけど、だからこそ、いやな「ドミン」「ドソミ」の剥きだしの不協和音が軽減される。平均律だからよくないっていう以前に、平均律の濁りをカヴァーしてなおあまりある工夫がベーゼンにあるね。日本ではあまり普及していないのはどうしてだろう。

戒居 ベーゼンドルフファアの生産台数は年間四百台程度で一台あたり一年以上時間をかけて造る作品です。数十年前は、アクション（打弦機構）を旧式のものを使用していたり、音の立ち上がりが他のピアノより遅く、タッチが重く感じられ、万人に好まれるピアノではなかったようです。そういった誤解をとくために、ベーゼンドルフファアを愛する、営業マン、技術者が頑張っています。現在は、アクションなども改良され、ベーゼンドルフファアも増えていきます。山梨のホールにはベーゼンドルフファアがたくさん入っています。牧丘町のベーゼンドルフファア

はとても評判がよく、レコーディングにもよく使われています。

調律の極意

玉木 戒居さんはどんなきっかけで調律師に？

戒居 父が調律師で、その影響が大きいです。父を見ていて簡単に楽そうにみえましたが、実際はたいへんな仕事でした。生涯修行です。

玉木 国立音大の調律科のご出身とのことだけど、そこではどんなことを勉強するの？

戒居 調律科は国立音大の別科で、調律専修で二年のコースです。初めの三ヶ月で調律はなんとなく形になり、そこから精度を上げていきます。それに加えて製図からピアノ制作、修理などを学びます。

玉木 三十年前くらいのことだけど、プロ野球大洋ホエールズの新入の野球選手の特技に「ピアノ調律」と書いてあって、なんで野球選手が？と思ったたら、実業団野球でピアノメーカーだったみたい。入ったら必ず調律やらされるんだって。野球しながらでもできるものなの？

戒居 私が知っている技術者の仲間にも、野球部に所属しながら調

律の勉強をしていた方がいます。メーカーでは、一年で技術を習得します。

玉木 調律のいちばんたいへんなのはどんなところ？

戒居 ピアノはとにかく音が多いですから。弦の数は約二百五十本。それを全部合わせていくことだけでも、膨大な仕事量で集中力が必要です。さらにその中の響きを大事にしていけないといけないです。タッチ感も鍵盤全て揃えていたり、時間のかかる作業です。

玉木 ピアニストにもそのたいへんさを認識してほしいよね。私も本を読んで調律の道具を買ってうちのアップライトに悪戯したこともあるけど、同じ弦が二本あって、完全のゼロビートにするのも難しいですよ。またオクターブ上でゼロビートにするのも難しい。真ん中の完全五度「ドソド」をゼロビートにすることも難しいけど、慣れればできると思うんです。ただ、ピアノはちゃんと純正に合わせるから、わざわざ半音の一〇〇分の二狂わせないといけない。アメリカの女性の調律師アナ・T・サリヴァンが書いた「ピアノと平均律の謎」（白揚社）という本にも、ちゃんと合わせてあるのに

それを少しずつ狂わせていかなければならない、こんないやな作業はない、と書いてあります。この狂わせる作業は、どうやってやるの？チューニングメーターを使うの？

戒居 チューニングメーターでもできますが、だいたい自分の耳で、五度は一秒間に約〇・五回四度は約一回のビートがでるように、というふうにやっています。

玉木 耳で聴いて、うなりの回数で判断するんだね。ピアノはゼロビートでは調律はできない。これはとても重要なことです。ヴァイオリンは完全五度をゼロビートにしますから、一番下のG線をピアノのG（ソ）とゼロビートにして他の弦をあわせていくと一番上のE（ミ）があわない。A（ラ）をピアノとゼロビートにして、ADG（ラレソ）と五度ずつ下がって取っていくとピアノの五度よりも低くなってしまう。半音の一〇〇分の二のちがいでだから何てことないだろうと思っていたらとんでもない。ふたつで一〇〇分の四ちがいますから、かなり低くなります。音って高く狂っているのは許せるけど、低く狂っているのは許せない。だからヴァイオリンは無意識

にピアノのA(ラ)より高くする。あれが一〇〇分の二の違うなんだろうね。

あと、ピアノは叩いてから、伸びる音って音の高さが違うんですね。どのくらいでしょう。

戒居 私も音を聞いていて変化するのはわかります。音響学会の実験によると縦振動と横振動でピッチがかわるそうです。打鍵した瞬間は縦振動で弦振動が駒ピンに沿って横振動に変わります。そうするとピッチが上がります。数字では〇・〇七一ヘルツだそうです。

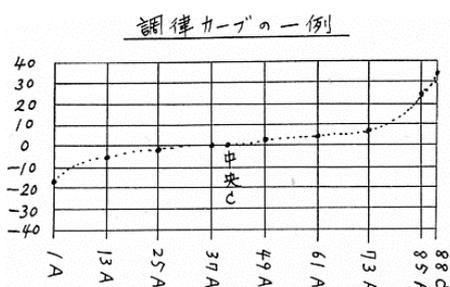
玉木 調律はどっちで合わせるの？

戒居 私は、国内のピアノも外国製も両方調律をしますが、外国製の方が持続音が長いです。打鍵した瞬間で合わせてしまうと、なんだか頭だけに音の主成分集中してしまうような気がします。なので私は気をつけて、発音してから音に動きがあり美しく消えるように最後まで聴きます。

玉木 うん。ピアノは音が減衰するだけに、余計に伸びている音を大事にした方がいいと思う。

知られざる「調律カーブ」の存在
玉木 その上になおかつ、ピアノ

にはとんでもないことがある。オクターブがゼロビートで合っているのは真ん中しかない。平均律なのは真ん中だけ。これがほとんど一般の方には知られていないと思うんだけど、「調律カーブ」っていうんだよね。人間の耳って高い方は上ずるのが好きで、低いのは威厳があるように低くするのがいいということなんです。溝部国光「正しい音階」(日本楽譜出版社)では、調律カーブはこうあらねばあらぬ、と表まで書いています。一方で平島達司は「ゼロ・ビートの再発見」(シヨパン)の中で「溝部さんの調律カーブについての説明はおかしい、あった方がいいと言っているのはウソだ、ヨーロッパのオルガンにそんなものはない」と書いている。実際にはどうなんだろう。調律カーブのないピアノって



溝部国光の調律カーブの表
出典：溝部国光「正しい音階」
(日本楽譜出版社) p. 86

薄気味わるいのかな。

戒居 そうですね。でも私は極端な調律カーブは好きではありません。オクターブはなるべくきれいに、そしてユニゾンで華やかさ、色をつけていきます。

玉木 ヴァイオリンはフラジオレット(注3)の倍音の高さでやるとフラットしているように聞こえるから、それより高く押える。ホルンも倍音と同じ高さでやると輝かない。少し高くするとソリストっぽくなる。それと同じなのが調律カーブだと思う。「ゆめ・くるみ割り人形ほか」の録音のとき「こんべいというの踊り」で、明らかにピアノの調律カーブとフラジオレットのヴァイオリンが合わない。あってないのが自動人形オルゴールみたいな感じでいいかなとOKしたんだけど、駄目といって調律カーブをやめたら直すのに一日かかるもんね。あそこで調律カーブの正体、つまり実際の音のずれがよくわかった。でも調律カーブがあるって、ピアノストもあまりわかってないんじゃないかな。

戒居 どうでしょう？ 知らない方もいると思いますが。

玉木 そういうことも含めて、ピアノストって音程に対していちば

ん無神経だと思っんですよね。

戒居 そうかもしれない。ピアノ以外の楽器は自分で調弦したり、息の使い方や音程をつくりませんが、ピアノの音程はほとんど決まっていますから、弾けばその音が出てしまいますよね。

玉木 ヴァイオリンソナタと一緒にやってピアノストから「音程悪いわね」と言われると、自分で調律したのか？ って言い返したくなる。チェンバロは自分で調律するじゃない。彼らから言われると悩むけどね。ピアノストはもつと調律にシビアになってほしいね。

グランドピアノとアップライト

玉木 家庭にあるピアノはほとんどアップライトですよ。

戒居 ええ。アップライトの調律もやりやすいよ。

玉木 アップライトは何であんな悲惨な音がするんだろう。

戒居 それはちよつと言いつつだと思えますが、でもグランドピアノに比べると純粋な音ではなく、響板面積狭いといった理由があげられます。それと響板の形にも問題があると思えます。グランドピアノの形が理想的な形です。



駒にそった形のグランドピアノ

ドイツ語
でグラン
ドピアノ
をフリユ
ウゲル
(翼)形
といいま
す。なぜ
あの形に

なるのかと言うと駒に沿ってボデーの形状がついているからです。
玉木 ピアノの駒って？すぐわかないからね。駒がないと音程を作れないからあるんだらうけど。

戒居 (ピアノの部屋へ移動してピアノを開けて説明)これが駒です。ケース(側板)に沿って駒があります。アップライトピアノでも工夫されている物があります。『ジヨキョウバン』といいます。

実は「助」ではなく「除」く響板と書きます。弦振動は駒を伝わって響板に届き、その多くは駒に対して直角に伝わります。そのため、駒に対して平行な二つの角の部分で乱反射が起こります。響板の余分な残響を取り除く除響板です。
玉木 いやいや、これはおもしろい。そんなこと知らなかった。
戒居 それから弦長が短いので、

グランドピアノのより音は濁ってしまします。

玉木 グランドピアノをポーンと鳴らしたとき、全然アップライトとちがう。ひとつの音の伸び方がいいな、と思う。あんまりいうとピアノメーカーが気を悪くするかもしれないけど、アップライトが間に合わせであるって、一般の方にもわかってほしい。あと電気ピアノってあるじゃないですか。あれはもつとひどい。響板とは関係ない原理で音が出ている。アップライトでもなんでも、ペダルを踏むとダンパーが外れて全ての倍音関係にある音が一緒に鳴るから豊かな響きになるのに、電気ピアノは弾いた音が伸びていくだけだから貧弱にしか聞こえない。

ピアノで古典調律

玉木 戒居さんは古典調律はやってない？

戒居 依頼があれば調律します。以前ベルクマイスターで調律したことがあります。そしてバッハを聴いたらとてもすすきりした曲になりました。ただ調性がかわると、濁った和音が出てきてしまします。平均律はどの調でも濁りはあります

すが、極端に濁るところがでないのが利点です。ピアノの調律は時間のかかる作業です。調性が変わるたびに調律を直していたら時間がいくらあっても足りません。演奏する時間がなくなっちゃいます。しかし古典調律にはとても興味があります。時々家のピアノで練習しています。玉木さんとの出逢いが、一段とその必要性を感じさせられました。今回の『くるみ割り人形ほか』のレコーディングでも工夫をしました。調律カーブはなるべく少なくして、Eの音を若干低くしています。それは最小限ですが、一番変化をつけることができるのが、ユニゾンだと思っています。

ベース弦の低いほうは一本弦ですがそれより高くなると二本あるいは三本になります。例えばこの三本の合わせ方、微妙なさじ加減で音の伸び、倍音など変わってきます。これはとても可能性のあることだと思えます。

玉木 なるほど。いろいろなおもしろい試みができそうだね。それにしても古典調律の隘路はホールが許さない、ってこともあるよね。
戒居 そうですね、ホールとしては安定した状態にピアノを保つた

め、ピッチの変更も嫌う所があります。もしかしたらホールじゃなく、調律師がそうなのかな？

玉木 いろいろ障壁はあるけど。鍵盤で古典調律にこだわっている方と話す時、ヴァイオリンは耳で純正律にできるからいいんだよ、鍵盤はたいへんなんだよ、って言われる。でも、例えばモーツァルトだったら、ミントーン的にすることもできるんじゃないかな。使わない鍵盤の方が多いんだから、ミントーンそのものじゃなくて、近づけたものでも、十度の汚い音がカヴァーできるんじゃないかな。どこかそういうのを許してくれるところ、古典調律でやってみたいな。そのときはどうぞよろしくね。
戒居 わかりました。楽しみですね。



えびすいピアノ調律販売
〒360-0816
埼玉県熊谷市石原1277-8
電話 048-527-3618

(注1) ベーゼンドルフアー
一八二八年、ウィーンにてイグナ
ーツ・ベーゼンドルフアーにより
創業された。各国の皇室や王室の
御用達として選定されるなどし
て名声を高めていく。作曲家にし
て超絶技巧のピアノリストであつ
たフランツ・リストの激しい演奏
に耐え抜いたことで、多くのピ
アリストや作曲家の支持を得るよ
うになり、ウインナー・トーンを
今に伝える名器として人気。日本
国内には総代理店として日本ベ
ーゼンドルフアー社が静岡県磐
田市にあり、本社と東京、大阪の
三カ所にショールームを持つ。ピ
アノは八八鍵が標準的だがベー
ゼンドルフアーは九二鍵、九七鍵
のものがある。

(注2) スプルース

マツ科トウヒ属の常緑針葉樹。軽
軟で、弾力性がある。良質なもの
が、ピアノの響板やヴァイオリン
の甲板など、楽器材として用いら
れる。

(注3) フラジオレット

弦楽器の弦を軽く押さえること
により、倍音を出す楽器の演奏技
法。ハーモニクスとも言ふ。弦を
指板にまで押さえつけず、軽く触
れる程度で弾いて、高く澄んだ倍
音を出す。

ベーゼンドルフアーについて
「もっともっと詳しく知りた
い!」という方のために、セミナ
ーのご案内です。ベーゼンドルフ
アーの歴史、構造上の特徴などを
詳細に学ぶことができます。

* * *

日時 二〇〇五年六月三日(金)
十五日〜十七日

場所 市川市文化会館小ホール
※一八時三〇分〜ピアノコンサ
ート

主催 日本ピアノ調律師協会

関東支部京葉地区

お申し込み・お問い合わせ

電話 043-236-0007

日時 二〇〇五年六月十二日(日)

十四時〜十七時三〇分

場所 日本ベーゼンドルフアー

大阪ショールーム

お申し込み・お問い合わせ

電話 06-6392-0200

日時 二〇〇五年六月十九日(日)

十三時〜十六時三十分

場所 日本ベーゼンドルフアー

東京ショールーム

お申し込み・お問い合わせ

電話 03-5351-1591

高齢化社会と純正律

純正律音楽研究会の老人医療、老

人福祉の取り組みに関する報告です。

☆「純正律の効果」が優秀賞に

前回の会報(十二号)でお伝え
した全国介護老人保健施設全国
大会における介護老人保健施設
「はまなす」の学会発表「純正律
音楽の効果〜純正律音楽で癒さ
れた〜」が、約八百五十件にのぼ
る発表の中から十五件の優秀賞
に選ばれました。優秀賞に選ばれ
た演題は今年八月に横浜で開催
される第十六回全国介護老人保
健施設全国大会の開会式で表彰
されます。

☆老健施設でのコンサート

四月二十五日(月)、介護老人
保健施設「はまなす」で玉木宏樹
の純正律ヴァイオリンコンサ
ートを開催しました。ミーントー
ンハープの伴奏CDで「春への憧
れ」「ケルト幻影」などを演奏。
施設長福田六花先生とも共演。ミ
ーントーンハープとヴァイオリ
ンによるモーツァルトは、テスト
録音したものを、他の純正律音楽
のCDと同じように認知症専門
棟で流して頂いています。

☆呆け老人をかかえる家族の会

当会としても老人医療の分野

めに、理事会で関連団体への加入
を検討し、二月末「呆け老人をか
かえる家族の会」に当会代表玉木
宏樹が入会しました。去る五月八
日(日)には東京しごとセンター
で開催された東京支部総会・交流
会に参加。出席は世話人も含め約
三十名。認知症のご家族を介護さ
れる方々の介護方法の工夫や悩
みなどのお話を伺ったり、昨年京
都で開催された国際会議のVTR
を視聴するとともに、玉木より
純正律について老健施設での事
例等を説明し、純正律音楽CD
「光の国へ」を事務局に寄贈しま
した。純正律音楽について、次号
の家族の会東京支部会報で紹介
され、希望者にCDの貸し出しを
して頂けることになりました。

☆介護福祉士団体機関誌で紹介

東京都介護福祉士会の広報ご
担当の方が家族の会に参加され
ていたことをきっかけに、次号の
介護福祉士会機関誌に純正律に
ついて寄稿することになりました。
認知症高齢者デイケアに携わ
る介護福祉士の間でも音楽に対
する関心は高いそうです。

は、積極的に関わっていくた

純正律と邦楽

【前編】

純正律音楽研究会代表

作曲家・ヴァイオリン奏者

玉木宏樹



去る四月十四日、初台（東京都新宿区）の東京オペラシティのリサイタルホールで、邦楽器の純正ピタゴラス音律による「いちめんの菜の花」コンサートをを行った。プログラムは全六曲、その中で洋楽器は、最後の曲の私が自作自演したヴァイオリンと、ドクター福田六花氏の新曲のギターとパーカッションだけで、あとは全部邦楽器アンサンブルである。主催はNPO純正律音楽研究会ということになっているが、実際はほとん

ど西潟昭子さんと現代邦楽研究所の仕切りであり、お客さんの大半は現邦研関係、もしくは福田六花氏のファンのように、純正律という言葉もあまり聞き慣れず、「純正ピタゴラス」と言われても「何それ？」という人も多いと思われた。しかし純正律音楽研究会の会員の方からは「邦楽器を純正律になんてどうやるのか」「純正ピタゴラスと一緒に書いてあるのはどういうことか」というきつい質問もあったため、当日司会進行する私にはある種のプレッシャーがかかり、西潟さんと相談して、一部の最後に番外として「純正律」の説明コーナーを設定した。

「純正ピタゴラス」というから違和感を覚える人もいるかもしれない。なぜなら私は常々、ハモるためのトレーニング器械「ハーモニートレーナー」を持ち歩いて、いかに平均律ピアノがハモっていないかということばかり言い続けてきたからである。大体、世界的に純正律というと古代ギリシャのアリストク

セノスの発見した純正長3度をもとにしたハモる、つまり協和音程のチューニングということになっている。もちろん私の論法もそうになっている。一方、ピタゴラス音律というチューニングは、もっぱらメロディを歌う為の方法論と捉えられ、和音による伴奏形態のない民謡系では世界中に分布している。ごく一部の専門書でも、純正な音律には二種類ある、と記している本もある。要するにメロディを歌うピタゴラス音律、純正にハモって伴奏するアリストクセノス音律（いわゆる純正律）のことである。ピタゴラス音律は完全5度と完全4度のくり返しで得られた音階で、みなさんご存知とは思うけど、**譜例**のようになる。この並びで十二個の音を得た後、「シ」のシャープと下の「ド」から1オクターヴ上の「ド」を同じ高さとし、ここで打ち切っている。「みなし」というのは、実は同じ高さではないからである。「シ」のシャープの方が「ド」よりも半音

の100分の24の音程分高い。そんな程度、どうってことはないだろうと思われるかもしれないが、人間の耳というのは恐ろしく精巧にできていて、どんなに自分

は音痴かということを目（？）する人にでもわかる。いや、かえってそういう人の方が反応が鋭い場合が多い。それで、音階を順に並べて半音も入れ、十二個の音を固定しようとする、オクターヴ上の「ド」の間のことかはこの半音の100分の24の差を封印しないと、オクターヴが完成しない。それで古来どの音とどの音の間に封印するかで議論したが、一番使われない音程として選んでいるから、曲によって封印の場所が違ったりする。

このピタゴラス音律の最大の欠点は、長3度が広すぎて、絶対にハモれないことである。しかし、このピタゴラス音律の音階は世界中に存在し、民謡の90%はピタゴラス音律であって、日本も全く同様である。もちろんピタゴラス一派が世界中にその原理を広めたのではなく、人類

平均律の普及の 思想的背景について (3)

純正律音楽研究会理事

黒本朋興

平均律はいつ広まったのか。ヘルムホルツ以降、十八世紀だという説が有力であった。例えば西原稔氏は平凡社から出ている『音楽大事典』(一九八三)の「和声理論」の項で「十八世紀に入ると、J・C・F・フィッシャー、さらにバッハにより十二平均律が実用されたが、それに呼応して一七二二年にラモーが「和声論」を著した。」と書く。もちろんこれは間違いである。ヴェルグマイスター律など十二の

調すべてが使える不等分律と平均律が混同されていたことに原因があると言えるだろう。十八世紀に実用化されたとされる「十二平均律」とは、必ずしも現在の平均律のことを指してはいない。だとすれば、この現在の平均律が広まったのは、一体いつのことなのだろうか。

平島達司氏は『ゼロ・ビートの再発見 平均律への疑問と古典音律をめぐって』(一九八三)の中で平均律が広まったのは十九世紀末だとしている。ところがこの著作は、広く音楽学学者の間で受け入れられているとは言い難いようだ。例えば、一九八八年頃、日本を代表する音楽学者である渡辺裕氏とお話する機会に恵まれた時、私は氏に平均律はいつ頃広まったと考えているか、そして、平島氏の業績をどう捉えているか、について質問を試みた。すると「平均律の普及は、言われてきたよりももっと遅い時期であろうと思われる。平島氏は十九世紀末だとしておられるが、あそこまで言い切れるかどうか。でも少なくとも十九世紀に入ってからのことではないか、というのが

私の理解です。」とおっしゃられた。平島氏は自著の出版に合わせるかのように、松本ミサヲ氏などの同士の方々と一緒に日本音楽学会で、調律の諸問題を扱った討論会を実施しており(『音楽学 第二十九卷(三)』、一九八三)、多くの音楽学者は平島氏の提言を知っていたはずである。

にもかかわらず、音楽学者の反応が鈍いのは何故なのだろうか。平島氏の専門は化学であり、その意味で音楽学に関しては在野の研究者と見なされていたのであろうか。あるいは平島氏の説は間違っているのであらうか。以下、検証してみたい。

まず平島氏も援用しているアレクサンダー・ウッド著、『音楽の物理学』(初版一九四四)から引用してみよう。

* * *

一八五一年の大英博覧会に展示されたオルガンはひとつとして等分平均律に調律されたものはなかった。イギリスにおける最初の等分平均律のオルガンは一八五四年ごろ市場に出まわったようである。もっともブロードウッド社製のピアノは一八四二年にこの新しい方式の調律が

なされていた。

* * *

工業製品としてのピアノの普及と平均律の普及がパラレルであったと考えるなら、平島氏が一八四二年以降に平均律が広まったと考えるのも自然な成り行きではある。ただ、一八四二年に平均律に調律されたピアノが出現した事実は、上記の渡辺氏の主張とも矛盾しないことに注意したい。にもかかわらず、平島氏が一九世紀末であると主張する積極的な理由は何なのであろうか。

平島氏は二つの理由を挙げている。第一の理由は、この時代に平均律の特徴を上手に活かした作曲家が出てきたこと。ドビュッシーのことである。面白い指摘であるし、間違っていないが、この理由だけで十九世紀末と断じるのは不十分な感が否めない。第二の理由は、メトロームの出現と普及である。では、メトロームと平均律はいかなる関係にあるのであろう。今回は、それを詳述するスペースがないので、次回以降見ることにする。

今回はポルトガルの伝統音楽のCDを紹介します。びしっとハモった男性ヴォーカルも素晴らしいのですが、この作品の面白いところは伴奏楽器にバグパイプが多用されているところです。しかもジャケットの写真をみると、このバグパイプ、我々が良く知っているものと比べると小型です。

さて、バグパイプというとアイルランドの民族楽器と知っている人が多いのではないでしょう。実は違います。歴史学者のエリック・ホブズボウムによれば、かつてはヨーロッパ中で見られた楽器だったと言います。それが十九世紀末のアイルランドのナシヨナリズム運動においてこの地域の伝統を表象する楽器として祭り上げられ、それ以降バグパイプはアイルランドという図式が世界に広まり定着してしまっただけです。

私が南仏のエクスに住んでいたときの「悪友」の一人にチエリというポルトガル人がいました。早速、「オレ、ポルトガルの伝統音楽のCD持っているんだ。

このグループ知ってる？」とこのCDを見せてみました。すると「なにこれ、知らない。オマエ、このCDどこで買ったの？」「もちろん東京だよ。」「え、じゃあ、ポルトガル人のこのオレも知らないCDが東京で売られているわけ!!」と驚きの声をあげました。実際、日本の、特に東京の情報集積量はすさまじいものがあります。

で、次に、CDをかけてみると、「そうそう、確かにこれはポルトガルの音楽だ。オレの街でもな、祭りの時にバンドがこんな音楽を演奏して、それに合わせてこんな風にカスタネットを鳴らしながらみんな踊るんだよ。」と踊りながら語ってくれました。音楽といったものが、単なる音の組み合わせの技芸なのではなく、踊りに使われる身体、生活に根ざした風習などと深く結びついている、ということを実感しました。

更に、チエリはポルトガルがアイルランドから受けた文化的影響について語ってくれました。私が「でも、バグパイプがアイ

ルランドの民族楽器になったのは、十九世紀末以降のことじゃない？もともとバグパイプはヨーロッパ中であつたわけだし、それを考えればポルトガルのバグパイプがアイルランドからもたらせたとは言えないんじゃない？」と言うと、「いや、指の使い方とか、奏法に特殊なところがあつて、それはポルトガルとアイルランドのバグパイプにしか見られないんだよ。ポルトガルのバグパイプのほうが小型なんだけど、ポルトガルとアイルランドの間になんらの影響関係があるのは明らかなんだよ」と答えてくれました。

確かにCDは東京で買ったのですが、こういう文化的背景は実際にポルトガル人の友人に出会わないとなかなか知り得ないものだなあ、と思いました。

▲CDに関する問い合わせ先▼

M A レ コ ー デ ィ ン グ ズ (マ ー キ ュ リ ー 内)
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋1-12-6
昭 和 ビ ル 4 階

T E L 0 3 - 5 2 7 6 - 6 8 0 3
F A X 0 3 - 5 2 7 6 - 5 9 6 0

純正律が響くお店

純正律音楽のCDを取り扱っている、こだわりのあるお店をご紹介します。

自然食品

有機村

(山梨県甲府市)

店長 井上直記さん



有機村とは？

「有機村は自然食品を扱うオーガニック専門店です。地元、山梨で採れた無農薬栽培によるフルーツ・野菜などの自然食品を販売するとともに、自然食品(マクロバイオティック)を使った料理教室や講演会も企画するなど、自然食品に興味を持つ人達のコミュニケーションの拠点となっているお店です。」

純正律との出会い

「純正律については、日本CD協会の機関誌「マクロバイオティック」で知りました。興味をもっていったところに、タイミンが良く四月二十四日に山梨でコンサートが開催されると聞き、コンサートに協力するとともに、お店でも純正律のCD、書籍を取り扱うことになりました。」



自然食品有機村

〒400-0065

山梨県甲府市貢川1-3-18

電話 055-222-1872

<http://www11.plala.or.jp/u-kimura/>

有機村の目指すもの

「有機村は、地球環境保護、人と自然の共存共生、食の安全と健康、心が喜ぶ本当に幸せな生き方、自由平等で平和な心地よい社会を目指す、そんな思いから始まったお店です。地元で地に足をつけ農を営む仲間や、昔ながらの製法で素材を生かして加工している人、地球の未来を真剣に考えるものづくりに励む人、癒しを言葉や音楽で提供する人。いろんな立場の人達の思いを商品とともに大切に扱っていかうと思っています。」



無農薬の自然食品、有機栽培の綿で作った衣料品などとともに、お店に並ぶ純正律のCD

連続エッセイ
外科医のうたた寝 第十二話

山の神の使者

純正律音楽研究会理事

福田六花(医学博士 作曲家)

昨秋から河口湖畔に建築中だった自宅が完成し、少しずつ引っ越しをしています。内外装作業は自主施工し、三十名以上の友達が作業を手伝ってくれました。

引っ越して三日目の朝、午前五時に目が醒めて窓の外を眺めていると、背後の足和田山から僕を呼ぶ気配がただよってきました。ならば行ってみようかとトレッキングウェアに着替えて、裏山に登り始めました。二年前から毎週木曜日、河口湖ライフの先輩木村東吉さん達と足和田山にある東海自然歩道を早朝走っており、標高八三〇メートルの麓から頂上(五湖台)一三五五メートルまで四十分程で駆け上がる過酷なコースは自分の庭のような親しみを持っています。

その朝初めてひとりで山道を走っている時、非常に不思議な体験をしました。標高が一二〇〇メートルを越えたあたりは、山の稜線を走る幅二メートル弱のゆるや

かな登り坂になっていきます。軽快に走る僕の左横の藪のなかを、併走してガサガサと動く気配がします。約一〇〇メートルいって藪が切れたところで、真っ黒なイノシシが飛び出してきました。イノシシはそのまま五〇メートルほど僕に併走して走り続け、そこで向きを変えて反対側の斜面を駆け下りていきました。

今までに何度かは山の中でイノシシを見たことはあったけど、どれもほんの一瞬の出来事で、せいぜい走り去る後ろ姿を眺めた程度でした。こんなに間近で、こんなに長い時間イノシシが走るのを見たのははじめてのことです。その日はずっと清々しい感覚に包まれて、家まで走って帰りました。

その朝のイノシシは足和田山の神様が、麓に引っ越してきた新参者に寄越した使者だなど感じ、これからこの自然の中で生活していくことを嬉しく思いました。



純正律

イベントレポート

純正律音楽研究会関連の
イベントについて紹介します

■日本Cー協会健康講座

05年02月20日
科学技術館（東京都千代田区）
主催 日本Cー協会

マクロビオティック（美容・健康・病気予防のための食事法）を普及する団体日本Cー協会のイベントでの玉木宏樹の純正律コーナーもすっかりお馴染みになりました。今回は米国でも活躍中の胃腸内視鏡の第一人者、新谷弘実先生による「腸相が語る正しい健康法」の講演と玉木宏樹の純正律講座の本立て。新谷先生の独自の食事健康法についての二時間に及ぶ迫力のある説明には三百名近い会場のお客様に混じり玉木も熱心に耳を傾けていました。休憩を挟んで玉木の出演、純正律の説明、「歓喜の翼」「ケルト幻影」などの演奏、リベラやアディエマスなど純正律的な作品の紹介など、四十五分といつものより長い持ち時間にもかかわらず

らずあっという間に終わりの時間となり、最後に好評の「枯葉」を演奏。新谷先生もフルートを演奏されるなど、音楽がたいへんお好きとのこと、帰り際には「こんどぜひジョイントしましょう。」と声をかけて下さいました。健康と音楽のコラボレーションはますます広がります。

■土曜日のお茶会 純正律でモーツアルトを

05年03月12日 ティールームフレ
ンズ（東京都港区）
主催 純正律音楽研究会

会報でもお伝えして来た、ミントーンハープとヴァイオリンによるモーツアルトを初公開。更にこの企画が発展して、デュオヴァイオリンによるモーツアルトもあわせて聴いて頂くことになりました。まずはヴァイオリンリスト水野佐知香さん玉木宏樹のヴァイオリンデュオで「恋とはどんなものかしら」「交響曲第40番」「トルコ行進曲」「モーツアルトの子守歌」などを演奏。つづいてミントーンハープを調律した高田明洋さんのトークショー。お客様からのアンケート結果には「ハープのことが理解できてよかった」という感想もあれば「もっと詳しく知りたい」という声も。高田ハープサロ



※高田ハープサロンハープセミナーURL
<http://www.e-gakkiten.com/seminar/seminar>

ンのホームページ「ハープセミナー」(*)にも詳しい説明が載っています。ミントーンに調律したアイリッシュハープを演奏するのは高木真理子さん。ソロでヘンデルのシャコンヌを披露した後、玉木宏樹のヴァイオリンとデュオでモーツアルトの「ヴァイオリン協奏曲第3番第2楽章」「フルートカレット」「ピアノソナタK331第1楽章」などを演奏。ミントーンハープの響きはいへん美しく、お客様から「心地よい」「澄んでいてとてもきれい」という感想を頂きました。ヴァイオリンとハープというちょっと珍しい組み合わせもお楽しみ頂けたのではないのでしょうか。最後は高木真理子さん、水野佐知香さん、玉木宏樹の3人で「春への憧れ」を演奏。こ

の日は玉木宏樹の誕生日前日のため皆さんにハッピーバースデーも歌って頂きました。ありがとうございました。7月には規模を拡大して開催しますのでご期待下さい。

■タンゴと純正律

05年03月19日 中嶋邸（千葉県柏市）主催 中嶋和子さん

玉木宏樹の高校時代の後輩である中嶋さんのお宅でのサロンコンサート。日本を代表するタンゴピアニストの小松真知子さんと、玉木宏樹のヴァイオリンの共演でクライスラーの「美しきロズマリン」「愛の悲しみ」でスタート、「お名前変奏曲」「きらきら星変奏曲」「まりと殿さま変奏曲」と冗談音楽で笑いをとった後、玉木が一転真剣に純正律を説明。ヴァイオリンでハモる音を探してピアノの音との違いを聞き比べる実験もしました。老健施設での事例も多くの方に興味を持っていただいたようです。演奏は「悠久のケルト」と「雪柳」の2曲。休憩を挟んで後半はタンゴ。小松真知子さんと若手バンドネオン奏者の鈴木崇朗さんが登場し、まずは玉木とともに「ジェラシー」。つづいて小松さんのピアノと鈴木さんのバンドネオンで「エル・チョコクロ」

「ガウチヨの嘆き」などを演奏。タンゴの歴史、バンドネオンの演奏方法についての説明もありました。再度玉木も加わり、「碧空」「真珠採り」などを三人で演奏。大きな拍手を頂き、アンコールは「チャルダッシュ」でお客様にも手拍子で参加して頂きました。昼と夜とあわせて百名近くの方にお集まり頂いた、あたたかいホームコンサートでした。

■ いちめんの菜の花コンサート
VOL. 2

05年04月14日 東京オペラシティ
リサイタルホール(東京都新宿区)
主催 純正律音楽研究会

音律と調律の視点から邦楽器の可能性を探求するこのコンサート、昨年にひきつづき第二弾も大盛況。吉松隆氏、福田六花氏、丸山和範氏、玉木宏樹によるバラエティに富んだ曲、現代邦楽研究所のすばらしい演奏を、西瀧昭子と玉木宏樹の息の合った司会でお楽しみ頂きました。

● お客様から頂いた感想より
「若い人たちのパワーと、熟年のプロの演奏家の芸との間に玉木宏樹さんの純正律の音楽の世界があり、人間味あふれるトークがコンサートを盛り上げていました。VOL. 3を期待しております。」

■ 純正律講座&コンサート

05年04月24日 ブライダルビレッジ
ティンカーベル(山梨県中巨摩郡昭和町) 主催 ハーモニーぱる

快晴できれいに富士山のみえる春らしいあたたかな日曜日、山梨の結婚式場「ブライダルビレッジティンカーベル」の教会で玉木宏樹の純正律講座&コンサートを開催しました。音響のすばらしい会場でバツハの無伴奏ヴァイオリン

ソナタから始まり緊張感漂うところを、おしゃべりヴァイオリン、ウクレレヴァイオリンなどで一気にやわらかい空気に。純正律の説明、伴奏CDにあわせて「歓喜の翼」「マザーズヴォイス」、デュオヴァイオリン「家路」、モーツァルト「春への憧れ」などを演奏。珍しくミュージックソー(のこぎり)で「さくら」も披露。河口湖から応援に来てくれた福田六花先生も登場し、老健施設「はまなす」での純正律の効果の説明、またオリジナル曲「都祈野」「ホワイトプレーヤー」を熱唱。最後は賛美歌「荒野の果てに」で締めくくり。終演

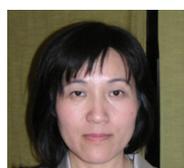


後は共催の自然食品店「有機村」で打ち上げ、お集まり頂いた皆さんの

感想などゆっくりお話を伺うことができました。

● 主催お疲れ様&ありがとうございます!

ハーモニーぱるの相良京子さん
(純正律音楽研究会会員)



「昨年十月に歌のサークル『ハーモニーぱる』に入りました。結婚式での聖歌隊もしてい

ますが、自分自身も含めて、みんな本当のハモリがどういふものなのか分っていないな、と思う所がありました。心から天國的にハモリたい、そして本当のハモリがどんなに美しいか皆にわかってもらいたい、純正律音楽のすばらしさを理解してもらいたい、という思いから、玉木さんをお呼びして、純正律コンサートを開催することにしました。今年二月の日本C-1協会のセミナーで生の玉木さんを初めてみたときは、ちょっと辛口で刺激的過ぎるかな、と思いましたが、実際には、とてもおもしろく、みんな笑って楽しめるコンサートでした。コンサートを聞いて、みんな本当の意味でのハモリを意識するようになったと思います。」

